

敦賀断層問題に関する有識者会合の理不尽な会議運営 — 一周到に準備された島崎委員の陰謀 —

はじめに

標記第4回会合が平成25年4月24日（水）14:00～16:30の予定で開催された。この評価会合は、「事業者と十分な議論を行っていないで結論付けている。（これまでの会合で事業者に与えられた説明時間【事前会合：0分、現地調査：30分、第1回：30分、第2回：0分、第3回：30分】）」という一方的会合運営に対する世論の批判の高まりを受けてしぶしぶ開催した会合であり、「今回は時間を制限せずに議論したい」との表向きの意向が伝えられていた。事実、委員と事業者のやりとりは予定時間をはるかにオーバーして4時間半近くに及んだが、終わってみると、何一つ議論は深まっておらず、事業者から新たなデータ等を示して丁寧に反論したものの委員は従来の主張を繰り返すのみで論点の整理すら行われず、次回会合での評価書取りまとめが一方的に宣言されたのみであった。

以下に、公開された議事録及びYou Tubeによる会議映像を基に、本会合の理不尽な運営について明らかにした。

2. 規制委員会の認識不足

議事進行を務める島崎委員は今回も議長としての役割を放棄し、委員の指摘と事業者の反論を公正・中立的な立場で整理することなく、個人的興味や見解でたびたび議論を中断させ、また、議論が技術的な核心に迫ろうとすると「見解の相違」の一言で議論を打ち切るなど、当初から結論ありきの会議運営を意図したものであった。議論の煮詰まらぬままに「次回に評価書をまとめる」との宣言は裁判官無き法廷での検察官による一方的判決に等しく、近代的な法治国家として決して認めることは出来ない。このような振る舞いが規制委員会の信用をどれだけ落としているか、規制委員会自身が認識すべきではないか。

3. 有識者会合の評価書案に関する論点

「有識者会合の評価書案」に関する事業者の反論は以下のとおりである。事業者の反論の詳細はこちら。

- ① K断層はD-1破碎帯ではなく、2号機原子炉建屋まで伸びていない。
- ② G断層はD-1破碎帯である。
- ③ D-1破碎帯（G断層含む）及びK断層は後期更新世（約12万～13万年前）以降に活動していない。従って、耐震設計上考慮すべき活断層ではない。
- ④ 「活動性がない」ことの立証責任が一義的に事業者にのみあるとする考え方は、法律的観点から適切でない。



4. 反論を無視した理不尽な会合の運営

以下に、会合の不条理な運営の例を紹介する。これらは一部であり、全部挙げれば枚挙にいとまがない。

1) 反論の確認及び事業者の主張について、新事実も含めた詳細な説明が行われた（議事録P2～P31）。しかし、この説明の途中でも、島崎委員の強引な会議誘導が見られた。

☞ 事業者が反論④について説明を開始すると、島崎委員が「…この会合では科学技術的な側面を取り扱っているのだから…この後の議論には立ち入りません…」と一方的に議題から削除した。規制委か事業者のどちらが立証すべきかはその後の科学技術的議論の展開に重要な役割を果たすものであるが、【規制委側の責任逃れのため】非民主的に口を封じている。

2) 事業者説明の後の質疑段階では、常識的には、まず各委員の意見を聞くのであろうが、島崎委員自ら率先して、重要なテーマ潰し（反論③）に掛かった（議事録P31～P32）。

☞ D-1破碎帯の浦底断層との同時活動性について地質学的証拠を補完するうえで重要な「地盤の安定性評価手法」に関して、島崎委員は、「…今のやり方は非常に立ち遅れている。静的な評価のみで動的検討が行われていない。…」と、この分野の専門家でもないのに他の委員に意見を求めることもなく個人的見解を披露し、事業者が「…そういう状況は十分承知したうえで旧保安院時代の指摘に基づいて検討した結果である。…」と反論すると、島崎委員は応じずに「これは時間があつたら後でちょっとやりますが」と【不十分な解析結果であるという印象のみをマスコミを含む傍聴者に植え付ける】ために早々に議論を打ち切った。

3) 続いて、「コメントでもよいか」との委員の発言を封じ、島崎委員は「…事実がわからないところがたくさん僕にはあるように思うので。例えば、…K断層のことでお伺いしたい。（反論③）」と自ら質問を繰り返し、他の委員が発言する機会をうばった（議事録P32～P35）。

☞ 島崎委員が「…前にも急に見せていただいて、よくわからないうちに終わってしまった…岩盤の表面の高さがどうなってい

るのかを知りたい。…前回1.8m食い違っているというふうに伺ったがそれも本当なのか…」と基盤の高さ関係について切り出した。事業者が「…1.8mは全部変位によるものかあるいは浸食されたものかということはまだ確認できていない。そのために今（G断層からK断層まで）掘り進めている…」と事実関係を説明した。島崎委員は、「説明はわかった」としながら、基盤の高さ関係の定量的な説明を引き出すべく、「岩盤の高さは見ないで掘り進むのか」と技術者のプライドを傷つけるような発言を繰り返し、「非常に簡単にG断層からK断層までどういう、でこぼこがあるか教えてほしい。」としつこく回答を迫っている。そこまで言われれば事業者（技術者）としても応じざるを得ず、おぼろげな記憶ではあるがとの前提で定量的な説明をしている。このやり取りが一段落すると、すかさず引き続いて鈴木委員が同じ質問を繰り返し、これを受けて再度島崎委員が「私が調査したら、まずそれ（基盤高さ）を調べますけどね。どういう調査をされたのか、非常に私としては不思議であります。」と事業者を煽る実に巧妙な連係作業が見られた。事業者は更なる説明を行ったが、島崎委員は、締めくくりで、「わかりました。」と言いつつも「横ずれもあるかもしれませんが。」と突如議論していない「横ずれ」の問題を持ち出してきている。これに事業者が反論するも、「あるかもしれないと申し上げましたので」と云って議論を打ち切っている。いくら議論しても、【最後は有識者会合の評価結果を正当化するような言葉で締めくくる】というやり方がその後も多く使われた。実は、この質問が会合の最後で見られる【島崎委員のパフォーマンス】であったことは最後になってみて初めて判った。同様な質問がその後2度（議事録P45～P47、P51～P52）繰り返されているが、よもやそこまで計算された質問であったとは思えないことであった。島崎委員は、会合の冒頭から「今日は技術的議論を行う」と宣言しつつ、実はこうした陰謀を随所に張り巡らしてしていたのである。こんな非科学的学者が規制委員会の委員長代理とは世界のどこにもあり得ない。辞任問題に発展することを強く懸念する。

4) 鈴木委員の「調査未了であればその時点でのデータで判断するしかない」と結論を急ぐ姿勢に、真摯に議論しようとする技術者の良心のかけらも認められない。島崎委員－鈴木委員の連携した陰謀そのものである。

☞鈴木委員は、K断層の変位センスや活動性の議論（反論①、③）に関して、事業者の「データ取得中」とか「今後実施する」との説明を無視し、「肝心のデータが一切出てこなくて、逆断層の事ばかり言われて、非常に誤解を生じる。…まだ調査未了と言われると、もうこれ以上、議論ができない。…ある時点でのデータから判断しなけりゃいけないわけで、…」

（議事録P38～P40）と自説を展開するのみで、データの充実を待って議論しようと言う姿勢は全く認められない。また、K断層とD-1破碎帯の関係（反論①）についても同様に、島崎委員と連携して早期に結論付けを行う意図が明らかである（議事録P49～P50）。

データ取得に6月までかかるという計画は有識者会合の委員も承知の事である。それなのに、データが出そう前に会合を設定した上に、【データが無いから議論できない】と云っていないものねだりをしつつ結論を急ぐ姿は為にする陰謀そのものである。

5) あまりのずさんな会議運営に事業者も我慢の限度を超え、論点を整理してほしいとの要望に対して、島崎委員はまったく聞く耳を持たない。40万年問題も事業者は蚊帳の外である（議事録P69～P72）。

☞事業者より「…一つ一つ議論をポイントごとにさせていただきたい…40万年の話も今検討中ですがと云うところで終わってしまいましたが…変位センスについては有識者の皆さんがどう思われているのか…薄片の話は今日の議論を踏まえて有識者会合としてどう判断されたのか…」と再度要望するも、島崎委員は「御意見はわかりますけれども、あまり細かいところまで議論してもしょうがないと私は思っていて…」と議論を深めていこうという姿勢の片鱗すら見られず、【今回で幕引きとする当初からの目論見】が見え見えである。

また、40万年という判断基準についても、島崎委員は「…最初の会合で決めました…その後、規制基準をどういうふうに検討しているかは全て公開で行っており、…」と判断基準の重みを理解しようとせず自らの行為を正当化し「…意見が異なると…この議論は今、この場での科学技術的な議論とそぐわない部分がありますので…」と議論を打ち切り、【なし崩しに既成事実化しようとする強引さ】は明らかである。河瀬敦賀市長も「なぜ規制委員会は結論を急ぐのか」と批判し、島崎委員長代理についても「（敦賀原発を）やめさせるのが自分の仕事と思っているのではないかと。不信感を持っている。」と記者会見で述べている。（5/8 朝日新聞他多数紙）

5. 本性を現したパフォーマンス

会合の最後で、目を覆うような光景が出現した（議事録P96～P97）。

☞島崎委員が会合の締めとして「ありがとうございました」と喋り始めたが、途中で突如立ち上がり、「…K断層で1.8m、…段差がある可能性が私は非常に強いというふうに感じましたけれども、皆さん1.8mって普通の人の身長以上あるんですよ。僕だってないですよ。1.8mってこんなにあるんですよ（と云って立ちあがったまま右手を頭の上方に翳す：下記画像参照）。…しかも、1回で30～40cmずれるというんですよ。この上に何か物が建っていて、30～40cmずれる可能性というのは、私は非常に恐ろしいと思うんですね。」とテレビカメラに向かってしきりに段差を印象付ける行動をとった。そして、「…事業者の意見も十分聞かせていただきましたので、この議論の内容も十分検討した上で、次回評価会合において、評価書を取りまとめさせていただきます。」と一方的に宣言した。反論のできない会合の締めの段階で、傍聴者やテレビカメラ向けに芸能人顔負けのパフォーマンスを行い、次回評価書取りまとめを独断で決めるといった暴挙に出た。事業者は「まだ議論が終わってない」と訴えるのがせいぜいであった。河瀬敦賀市長も「（破碎帯が）非常に危ないもののように印象付けた。委員長代理が行うべきことではない。私以外にもおかしいと感じた人はいると思う」（5/8 読売新聞他多数紙）と記者会見で述べている。

6. これからに向けて

第4回評価会合は島崎委員の目論見どおりに運営され、期待を裏切られた結果に終わった。5月15日の評価会合で評価書取りまとめを行うとのことであるが、IOJとしては、良識ある世論の支援を背景に、評価書の無効性を訴え続けて行く積りである。そうでなければ規制委員会には民主的運営が存在しないことになる。そんなことでよいはずはないだろう。